

# 津南町に完成のホワイトDC稼働 雪冷熱活用で消費電力削減を検証へ



テープカットで祝う(右奥は保存雪、左はコンテナDC)

県が民間事業者の公募を行い、昨年8月から津南町中深見で建設が進められていた「雪冷熱活用データセンター(ホワイトDC)」が完成し21日、

泉田裕彦知事らも駆けつけ現地で運転開始式が執り行われた。現代社会に欠かせない電子情報を保管するデータセンター(DC)は、

コンピューターのサーバーが熱を発生するため常に冷却する必要があり、このホワイトDCは豪雪地の雪約3千立方メートルを断熱シートで覆い貯蔵し、溶けだした冷水を熱交換システムでコンテナ型DCの空調冷房に活用することで、低コスト省エネ型DC構築の画期的な雪利用システムとなる。県は約1億円余を支援し、雪貯蔵と熱交換システムなどを整備。電気冷房を使う一般的なDCと比べて、予想消費電力量はほぼ半減と見込んでおり、5月のGW明けから、雪が溶けて無くなると思われる9月上旬まで実証実験に取り組んでいる。県は県内20箇所から津南町中深見甲、十日町市伊達丙、上越市、魚沼市の4箇所を候補適地とし

て示して事業者公募を行い、電気設備施工等の㈱アオスフィールド(新潟市)、DC運営の㈱ゲットワークス(さいたま市)、雪冷熱システム設計施工管理の㈱ドーコン(札幌市)ら4社共同企業体のみが応募し、立地場所として津南町の同所を選定した経緯がある。同企業体は、電源と空調、サーバー機器が一体型の特許出願済み次世代型コンテナDC1台を設置。その中には計5ラック

を配置。1ラックで政令指定1都市分の情報を保管でき、同DC1台の保管可能情報量は「テラを超えてペタの世界(担当者)」とする。通常施設管理は遠隔操作という。運転開始式で泉田知事は「日本のDCは都市部に集中。電気料が掛かるので海外への設置も進んでいるが、国家安全保障や地方創生の観点からも国内、しかも地方に置くべきだ。ホワイトDCは未来に可能性が広がる事業と期待している。ニーズは無限。大きな一つの産業に育てていきたい。津南町の優位性を理解頂き、来て頂ける環境整備を進めたい。全国的にも先進的な事業であり、雪冷熱を使うことから地球温暖化防止対策にもつながる。未来への投資。あの時、歴史が変わったとなるように、一歩前に出ながら頑張ってください」と意欲を示した。上村憲司津南町長は「雪活用システムがあることが何より嬉しい。我々にとり雪は逃れることのできない宿命。その雪を恵みとして活用の一つがこのホワイトDC。知事は常々、産業は福祉の糧であり県内に金の卵を作っていくと話していた。その実現であり、夢を一步踏み具現化。心弾む思いです。日本の津南町である日が来るように今後もご指導頂きたい」と期待感を示した。